

昭和こじょう会便り



第3号

名古屋市高年大学昭和鯨城会 平成8年3月発行

一年を省みて

会長 島崎祥一

昨年の二月、区会の行事に欠席の多かった私が、突然会長となり、皆様には大変ご迷惑をおかけ致しました。また、対外的な定期会合は予備知識のないまま出席しては恥をかいまいました。

今まで、呑気な生活をしていた私には、それらは大変勉強になる良い機会となりましたが、先輩諸兄の方々の暖かいご支援を戴き早くも一年が経ちました。

思えばこの一年間、行を共にしてきた伊藤・山本副会長とは、心の交い合う間柄となりました。これも一重に、区会運営の賜物と感謝しております。

この原稿を書いている時、次期会長をお願いする柴田 武氏が来訪されました。

柴田氏と私は、8年度の区会の進め方について懇談致しました。7年度の私がやり残した問題をお願いしたところ、次の新しい環境に対処される柴田氏の素晴らしい着想に感心致しました。その構想を聞いた私は、昭和鯨城会は必ず、更なる発展が期待できると確信致しました。会員各位のご協力を感謝して筆を置きます。

行事予定表

平成8年

1.	4月 3日 (水)	グラン・ドゴルフ	花田公園	13.30
2.	"月 17日 (水)	グラン・ドゴルフ	花田公園	13.30
3.	"月 24日 (水)	平成7年度総会	昭和区役所	9.30 6F会議室
4.	"月 29日 (祝)	八事山を歩こう会	八事山興正寺、昭和区行事に参加	

☆お願い

花田公園の付近には駐車場がありません。

初めて参加される方は、是非、自転車か公共交通機関をご利用下さい。

役員会便り

第6回役員会 1月10日(水)

- ① 平成7年度総会の準備について
 イ. 日 時 4月24日(水) 9.30~11.30
 ロ. 会 場 区役所6F会議室
 以上総会の日時、場所を決定し、会員への連絡は3月発行の「昭和こじょう会便り」第3号により連絡する。
- ② グランドゴルフ用具の備品化について
 継続審議中のグランドゴルフ用具の一部(ホールポスト、マット各8ヶ)を、8年度予算で購入することに決定。

ロ. 昭和区の社会福祉活動について、当会員のボランティア活動の紹介
 本会の会員廣江昭二氏、伊藤治郎氏が、ボランティア活動として眼の不自由な方々に陶芸の指導をされています。その活動状況が紹介された。

- ④ その他
 趣味の同好会の発足についての提案
 イ. 水泳クラブ
 ロ. 歩こう会など
 以上についての提案が出ました。いずれ参加希望者の募集がある予定。

第7回役員会 3月13日(水)

- ① 総会の準備状況
 イ. 7年度事業報告、決算について
 ロ. 8年度事業計画、予算案について
 以上について、概略説明があり了解された。
- ハ. 8年度の運営委員について
 期別に出して、近日中に会長に報告する。
- ② 8年度連絡世話人の一部変更について
 学区により、連絡世話人の一部交代が必要な学区が4学区あり、総会までに話し合っで決めることにする。今後、任期は一年とし総会前に見直しをする。特に期別にはこだわらない。

↓
 会長より個別に確認済です。

- ③ 報告事項
 イ. 学園校舎新築についての祝意
 他区会では、既に寄付が行われており、当区会では総会で皆さんにお願いすることになった。



祝 ご卒業

9期の方々は3月14日、めでたくご卒業されました。

伊 勝	文化B	阿部 元子	八雲町
"	文化B	金森はるみ	前山町
滝 川	生活A	堀木千鶴子	滝川町
"	文化A	近藤 武雄	川名山町
広 路	園 芸	松浦 顕	川名本町
松 栄	陶 芸	奥村千代子	陶生町
御器所	園 芸	鈴木 敏雄	阿由知通
	陶 芸	市野 幸枝	恵方町
吹 上	生活B	伊藤 光子	雪見町
川 原	生活A	須崎 俊子	折戸町
"	園 芸	栗田 龍彦	元宮町
"	陶 芸	宮崎 信次	山中町
鶴 舞	文化A	小島 悟	山脇町
白 金	生活A	山本きぬ子	福 江

以 上 14名



歓 迎

平成8年度より、10期生の方々10名が
新しく入会されます。

喜んでお迎え致しましょう。

伊 勝 生活B	阿保 久	福原町
滝 川 園 芸	左合 吉忠	妙見町
八 事 文化A	岩田 静子	南山町
広 路 園 芸	服部 賢次	川名町
松 栄 園 芸	近藤 彰	塩付通
御器所 園 芸	日比 昭満	桜山町
吹 上 生活A	今井孝四郎	北山町
〃 園 芸	飯田 和子	車田町
鶴 舞 文化B	高瀬 弘子	鶴 舞
白 金 文化B	祖父江重孝	白 金

以上 10名

塩付街道と

ウバメガシ

8期文A 石黒 博正

私は現在塩付街道沿いの御器所に住んで居ります。三河猿投神社所蔵の尾張太古図によると、御器所台地は海岸沿いにあり、熱田は半島で突出し、猿投山迄入江になっている。近くに吹上という地名があり、その昔海岸の砂を吹き上げていたという。

その台地に天正年間原野を開拓して石佛村を築いたのが服部惣市郎善昌で、その名前を付けた善昌寺が塩付街道の傍らにある。

この街道は、室町時代前後に鳴海潟と星崎七ヶ村の塩田で作られた塩を、馬の背に積んで山国に輸送した塩の道であった。

大戦前迄は、塩付街道と飯田街道が交差した塩付に馬蹄屋があり、松並木とか、道

を覆う雑木林があり、街道の所々に馬頭観音の祠があった。

この街道にあったウバメガシ2本が私の庭にある。これは前述の服部家末裔より譲り受けたもので、現在名古屋市銘木になり、桑原前知事揮毫による記念碑がある。

このウバメガシは、御器所台地であって幾星霜、海より吹き付ける風雪にも耐え、都会の中で西の木は約8米、東は約6.5米となり、樹勢なお盛んである。御器所台地に芽生えたものとするれば、千年以上を経過したものと推測される。

ウバメガシ(ブナ科)は常緑低木で、暖地の海岸近くに自生している。当地では知多半島の先端羽豆岬にある羽豆神社の表参道に群生しているが、大木(6~8)は少ない。

昔は、この若葉にタンニンが含まれていたことから、既婚婦人の「お歯黒」を作ったので、ウバメガシもここから出ている。

本州の千葉県以西、四国・九州に分布し、イマメガシとも言われている。公園や家庭の生け垣にも植えられ、又備長炭と呼ぶ良質の木炭が出来る。

友 人

6期文A 仲尾 豊

“いつかはと思ひし時に親友の
訃報に接し涙溢るる”

議員だったその友人が、生前私に、
「おい、お前マルチメディアやインターネットは、日本語で何と言うか知ってるか」

と聞かれた時、直ぐと返事ができず困ったことがある。

毎日の新聞、テレビに出てくるのに勉強が足らんなぁと思った。

今や膨大な広辞苑や漢和辞典などが一本のCDの中に収まってしまうとのこと、全く凄と思う。

こんなご時勢に八十代を迎えようとする我々は、これから如何に生きていくか、若い人との交際は中々できない。それに、世の中は目まぐるしく動き、次々と大事件が発生する。共に将来について語り会える友を、何処に求めていけばいいのか。世の中は成るようにしか成らんと、思う自分に気づき悲しみを覚える昨日今日である。

昭和鯉城会に入り新しい友ができ、時々顔を合わせて情報交換の出来る楽しみだけが、生き甲斐となってしまった私である。

昔の昭和区

その3

8期文B 柴田 武

1. 石佛村

村名の由来には色々あるが、その内の一つには名古屋城築城の際の石工たちがいた所とも言われています。範囲は北は飯田街道に接し、西は阿由知通付近で御器所村に接し、南は荒田町付近で瑞穂村に接し、東は五軒屋町付近で川名村と八事村に接して、山崎川と御器所村の灌漑用水に挟まれた地域でした。村の中心は今の松栄小学校の西の塩付通や石仏町あたりでした。

村の中心を南北に通っている塩付街道は、

笠寺丘陵の南端「星崎七か村」の海浜で精製された塩を運び、駿河街道（今の飯田街道）瀬戸街道を経て三河や信州方面に送られた塩の通り道でした。

村の石高は正保2年（1645年）尾張藩の調査によると、423石9斗2升とされており、尾張藩家老成瀬隼人正に給地されました。

村の東部の川名川（今の山崎川）は、川底が低く灌漑用水として村内を十分潤すことが出来ないため、台地の端の低くなっている所に溜池を造り丸池、平池、モリ池、長池があり、村内各所に水田が開かれました。

村の南部にある藤成神社は川原神社の分霊を祀ったものと言われ、村の氏神として信仰されていました。村の字古観音（あざふる観音、長戸町一丁目）からは、奈良時代の鬼瓦が発見されて、塩付街道西にある白山社に保管されています。又山崎川流域の南分町からは布目瓦が発見されて、ここを若宮遺跡と呼ばれています。

これらの事から、この付近には奈良時代から人が住んでいたことがわかります。

ガラスのドアを開けて

—ボランティア一年生—

5期陶芸 廣江 昭二

去る日、黒川の北区役所でのクラス連絡会に出席の途中、北区役所付近は高速道路工事で雑然としており、区役所前の横断歩道で信号待ちしていると、その隣に私より少し年配の男性が、同じく信号待ちしてい

た女子学生に「区役所へ行きたいが、何処か教えてください。実は眼がよく見えないので……」と尋ねていたが、その女子学生も知らないのか困惑していたので、私がとっさに「私も区役所に用があるので、ご案内しましょう……」と、その男性の杖がわりになって、話を聞きながらゆっくり歩き出した。

その人の話によると、眼が見えなくなったのはごく最近で、歩き慣れていないことと、妻と二人暮らしだが妻は病気で外へ出られず、付添いが居らず困っていたが、どうしても区役所の市民税係（2階）に用事があるので出て来たとのことであった。

今の世間には、こういう立場の人が多くあり、他人ごとではないと感ぜざるを得なかった。その人を2階の所用の場所まで案内し係員に依頼して会議に出席した。

もしかして、私がこれから書こうとしている小文のボランティアを始めていなかったら、なんとなく通り過ぎていたかも知れず、とっさに、そのような手を差し伸べる行動まではしなかったと思う。

私が始めたボランティア活動の場所は、川名の「名古屋ライトハウス・ディサービスセンター・クリエイト川名」で、ここは視覚障害の方、加えて運動障害など様々な障害を持った方に、手芸など手づくり作業を障害の程度に応じて手助けし、精神面や技能指導により自立の手助けをする施設である。

したがって、陶芸をその手段の一つとして取り入れ、月に二日間で作陶した後、乾燥・素焼・釉がけ・本焼の焼成作業を行う。

なお、障害の程度に応じた作業指導や、介添えは主に指導員や他のボランティアの方が同時に陶芸を覚えながらこれに当たり、私どもは、陶芸の概ねの技能を指導し、後は焼き上げることであります。

まだ短い期間ではありますが、ボランティア一年生として障害を持った方に感じたことは、

- 物を作ることに積極的であること。
- 自律心が強いこと・自分でできることは、自分でやりたいという意識が強い。
- お互いの思い遣りの気持ちが強い。
- 美的感性の豊かな人もあり、教えられるほどである。

また、ここの施設で指導に当たる職員の障害者への対応振りは、職業とはいえ見事と言うほかはない。穏やかで、慈愛に満ちているのが障害者との会話の中になじみ出ていることを感じた。

さらには、この種のボランティアは、焦らず、ゆったりとした気持ちで行うことが大切であることがわかった。

おこがましくも、陶芸を教えるほどの技能を持たない私が、習い覚えた僅かな知識技能が、こんな形で役立てることができていることに誇りを持ってよいのではないかと思うようになった。

かって、ボランティア活動の大切さが、頭の中では理解していたつもりであったが、所詮は観念的な理解に過ぎず、言うなれば、ガラスのドア越しに見ていたに過ぎず、ドアを開けて中に入った今、やっとボランティアの空気に、直に触れたような気がするしだいです。

シーボルトの家族

7期生B 島崎 祥一

私たちはシーボルトといえば、長崎に来たオランダ人。そして、日本人妻と娘を残して帰国した人。マダム・バタフライが思い浮かびます。ところが最近、シーボルトと家族の詳しい史実が発刊されました。題名の「日出づる国に魅せられて」は、余りにも日本を愛し、日本に尽くした家族のために、著者のゲンショレック博士がつけた題名です。

シーボルトは、日本に来て三年目に本国に召還されました。その理由は、東インド会社の利益を考えない人道主義者であったと言う。事実はその通りで、日本人の弟子の育成に夢中であった。彼は帰国する時に、全財産を友人に託して妻と娘の事を頼んだ。娘の“いね”は、日本で最初の西洋医術の助産婦となり、宮中へも召されたという。東京では多くの弟子たちが支援したが、帰国したシーボルトはドイツで結婚した。

彼は中部ドイツの出身で、二人の男の子には、幼年期から日本語と日本について教育をした。やがて、兄弟は日本に来て、父の意思を継ぎ、各国が武力で幕府と結んだ不平等条約の改定策を検討するため、大倉使節団の案内役を勤めた。外務省に入ってから、兄のアレクザンダーは、主務者として活躍し、65歳で亡くなった。

珍田外務大臣の追悼文を見てみよう。

「最も長い期間政府に仕え、愛する日本に、全身・全霊を捧げ、日本人の精神生活に親近感を抱いた人、アレクザンダー……」と。

弟のハインリッヒは兄の協力者として30年間勤めたが、病のため47歳で帰国した。

彼は明治天皇から特別年金を賜ったが、その額は、彼が研究生活を続けるに十分過ぎる額であった。

さて、シーボルトが日本へ第一歩を記してから、百七十年の歳月が流れようとしています。シーボルトをして、日本への愛情を懐かせた礼儀正しく勤勉な日本人が、再び、輝かしく育つ事を！。

それは、私共の仕事でもあります。

編集後記

昨年「昭和こじょう会便り」発刊に際して、浅学非才を返りみずその大役を仰せつかりましたが、本日、第3号をお届けさせて戴きます。

これも会員各位のご協力の賜物と厚くお礼を申し上げます。

広く会員各位からも数々のご投稿を頂き、ご協力を頂きましたが、春日井正幸氏の題字、廣江昭二氏の巧みな絵を戴きましたことは、法外の喜びでした。

思えば、これらの区会便りのあり方などにつき、多々、ご意見をお持ちの方も多いと思いますが、今後は更に広く原稿を頂き「昭和こじょう会便り」の充実を願ってやみません。皆様のご協力を感謝致します。

伊藤 記

題字 春日井正幸氏、カット 廣江昭二氏
編集委員

伊藤晴義、島崎祥一、山本保人、柴田 武